

障がい者の説明にみられる「ほんね」と「たてまえ」 —福祉系大学生と非福祉系大学生の比較—

○ 金城大学 岡村 綾子(003446)

キーワード:障がい者理解,ほんね,たてまえ

研究目的

社会福祉系大学の学生は学年進行に伴い障がい者に対する関心が高まり、理解も深まった（岡村，2001，2002 a，2002 b，2003 a，2003 b，2004，2005，2006 a）。しかし、この理解が本質的理解であるかは定かとは言えない。このことに関連した研究として、障がい者に対する潜在的態度と顕在的態度の両面価値的態度についての研究もおこなわれている（栗田他，2012）が、障がい者に対する顕在的態度（たてまえ）と非顕在的態度（ほんね）について調べた結果、顕在的態度と非顕在的態度とは一致することはなかった（岡村，2014 b，2015 a）。一致しない理由として考えられたのは、非顕在的態度の具体的内容が明確でないことによると考えられる。この点に関しては先行研究においても“ほんね”の問題であると指摘されている（清水，1985）が、その具体的内容については触れられていなかった。

そこで、小・中学生に対し障がい者について説明する場合として、質問紙調査にあらかじめ用意された複数の外見的説明事項と概念的説明事項を選択肢として選ばせた場合と「ほんね」及び「たてまえ」で説明する場合として同様に選択肢を選ばせた場合の学年進行に伴う傾向について検討してきた。その結果、小・中学生に対し障がい者について説明する場合は各学年とも外見的説明より概念的説明を選ぶ傾向がみられたが、学年進行に伴う変化が殆ど認められなかった（岡村，2018 b，2019 a，2019 b，2020）。また、障がい者について「ほんね」で説明する場合は、各学年とも外見的説明文を選ぶことが多く、「たてまえ」で説明する場合は、各学年とも概念的説明文を選ぶことが多かった。他方、「ほんね」または「たてまえ」で障害者を説明する場合、「ほんね」では外見的な説明を行い、「たてまえ」では概念的な説明を行うと考えられた（岡村，2019 b，2020）。障がい者について説明する場合、「ほんね」もしくは「たてまえ」の使い分けをするという二面性があると考えられ、特に、学年進行により「ほんね」と「たてまえ」を使い分けが顕著になると考えられた。

以上のことから今回は、小・中学生に対して障がい者について説明する場合、及び障がい者について「ほんね」で説明させた場合と「たてまえ」で説明する場合について、福祉系の大学生と非福祉系大学生を比較して、両者に違いがみられるかどうかを検討することにした。

研究の視点及び方法

調査協力者 A大学の2019年度福祉系3年生120人、4年生130人、非福祉系3年生170人、4年生173人、計593人を調査協力者とした。

調査内容 調査は質問紙調査とした。調査は、障がい者に対する読書の有無、障がい者に関するテレビ等の視聴の有無、一般的な問いかけによる障がい者に対する態度、障がい者と考える時の対象者の状況、初めて障がい者と関わった時期とその人が障がい者とわかった理由、地域の小・中学生に障がい者について説明する内容、障がい者について「ほんね」で説明する内容、障がい者について「たてまえ」で説明する内容などとした。

調査手順と調査用紙の回収 前期・後期の各々のオリエンテーションの機会を利用して、質問紙を配布し、自記式集合調査を行った。質問紙調査用紙については、福祉系3年生は120人に配布し、109人（回収率90.8%）、4年生は130人に配布し、111人（同85.4%）、非福祉系3年生は170人に配布し、165人（同97.1%）、4年生は173人に配布し、140人（同80.9%）がそれぞれ回収できた。

倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会研究倫理指針を厳守し実施した。調査対象者には、研究の趣旨や得られたデータは研究目的以外には使用しないこと、調査結果の検討・分析に際して個人が特定できないように配慮することを説明後、調査への参加を要請し、調査参加をもって研究協力受諾とした。本研究は金城大学研究倫理委員会の承認を得た。

研究結果

1. 小・中学生について説明する場合

小・中学生に対して障がい者についてどのような説明をするかという質問には、質問紙調査にあらかじめ用意された複数の説明事項を選択肢として呈示し、複数選択可として選

ばせた。質問紙の選択肢は表 1 に示した。福祉系 3 年生が最も多く選んだのは概念的な説明の「f. 私たちと違った魅力や個性をもっている人」が 39.3%であった。次いで概念的な説明の「d. 私たちと何も変わらない一人の人間」と外見的な説明の「o. 普段生活している場で不自由を感じている人」が 34.4%，外見的な説明の「i. 他人の力（手伝い）が必要な人」が 32.8%，概念的な説明の「n. 私たちと同じ尊厳をもった人」が 29.5%であった。福祉系 4 年生が最も多く選んだのは概念的な説明の「f. 私たちと違った魅力や個性をもっている人」が 58.6%であった。次いで外見的な説明の「q. 病気や障害によって日常生活を送ることが困難な人」が 46.5%，概念的な説明の「n. 私たちと同じ尊厳をもった人」が 41.4%，外見的な説明の「o. 普段生活している場で不自由を感じている人」が 40.4%，外見的な説明の「i. 他人の力（手伝い）が必要な人」が 37.4%であった。非福祉系 3 年生が最も多く選んだのは外見的な説明の「o. 普段生活している場で不自由を感じている人」が 32.1%であった。次いで概念的な説明の「f. 私たちと違った魅力や個性をもっている人」が 31.0%，概念的な説明の「n. 私たちと同じ尊厳をもった人」が 28.6%，外見的な説明の「i. 他人の力（手伝い）が必要な人」と概念的な説明の「t. 見た目は異なるが差別してはいけない」が 27.4%であった。非福祉系 4 年生が最も多く選んだのは外見的な説明の「q. 病気や障害によって日常生活を送ることが困難な人」が 39.0%であった。次いで概念的な説明の「d. 私たちと何も変わらない一人の人間」が 36.2%，概念的な説明の「f. 私たちと違った魅力や個性をもっている人」が 33.3%，外見的な説明の「i. 他人の力（手伝い）が必要な人」が 32.4%，外見的な説明の「o. 普段生活している場で不自由を感じている人」と概念的な説明の「t. 見た目は異なるが差別してはいけない」が 31.4%であった。

表 2 には学年ごとの外見的な説明の選択肢別および概念的な説明の選択肢別の選択数を、学年ごとにそれぞれの選択肢別の選択数を合計した総選択数とその百分率を示した。なお外見的な説明が 14 選択肢、概念的な説明が 8 選択肢だったので、選択肢数を同数に見立てるために概念的な説明の選択数を 1.75 倍にした。また、百分率は各学年の外見的及び概念的な説明の選択数の合計でそれぞれの選択数を除して算出した。この表によると、福祉系 3 年生が外見的な説明の選択肢を選んだ割合は 48.4%，概念的な説明の選択肢を選んだ割合は 51.6%，福祉系 4 年生では外見的な説明が 45.3%，概念的な説明が 54.7%，非福祉系 3 年生では外見的な説明が 42.0%，概念的な説明が 58.0%，非福祉系 4 年生で

は外見的な説明が 45.6%，概念的な説明が 54.4%となった。これらの結果から，福祉系・非福祉系ともに概念的な説明が多かった。

2. 「ほんね」または「たてまえ」で説明する場合

1) 「ほんね」で説明する場合

障がい者について「ほんね」で説明する場合，福祉系3年生が最も多く選んだのは外見的な説明の「o. 普段生活している場で不自由を感じている人」で，39.3%であった。次いで外見的な説明の「q. 病気や障害によって日常生活を送ることが困難な人」が36.1%，外見的な説明の「i. 他人の力(手伝い)が必要な人」が34.4%，外見的な説明の「s. 生活に支障をきたしている人」が31.1%，外見的な説明の「h. 私たちより上手くできることが少ない人」と外見的な説明の「k. 私たちよりものごとを進めるのに時間がかかる人」が24.6%であった。福祉系4年生が最も多く選んだのは外見的な説明の「q. 病気や障害によって日常生活を送ることが困難な人」で，56.6%であった。次いで外見的な説明の「o. 普段生活している場で不自由を感じている人」が49.5%，外見的な説明の「s. 生活に支障をきたしている人」が45.5%，概念的な説明の「f. 私たちとは違った魅力や個性をもっている人」と外見的な説明の「i. 他人の力(手伝い)が必要な人」が35.4%であった。非福祉系3年生が最も多く選んだのは外見的な説明の「q. 病気や障害によって日常生活を送ることが困難な人」で，32.1%であった。次いで外見的な説明の「s. 生活に支障をきたしている人」が29.8%，外見的な説明の「o. 普段生活している場で不自由を感じている人」が28.6%，外見的な説明の「i. 他人の力(手伝い)が必要な人」が27.4%，概念的な説明の「f. 私たちとは違った魅力や個性をもっている人」と概念的な説明の「t. 見た目は異なるが差別してはいけない」と外見的な説明の「u. ちょっと個性的である人」が17.9%であった。非福祉系4年生が最も多く選んだのは外見的な説明の「q. 病気や障害によって日常生活を送ることが困難な人」で，32.1%であった。次いで外見的な説明の「s. 生活に支障をきたしている人」が29.8%，外見的な説明の「o. 普段生活している場で不自由を感じている人」が28.6%，外見的な説明の「l. 私たちと異なったところがある人」が31.4%，外見的な説明の「i. 他人の力(手伝い)が必要な人」が30.5%であった。

各学年の回答された選択肢を外見的な説明の選択肢と概念的な説明の選択肢に分類し、表2同様に計算し直した結果を表3に示した。この表によると、福祉系3年生が外見的な説明の選択肢を選んだ割合は58.1%、概念的な説明の選択肢を選んだ割合は41.9%、福祉系4年生では外見的な説明が58.5%、概念的な説明が41.5%、非福祉系3年生が外見的な説明の選択肢を選んだ割合は56.8%、概念的な説明の選択肢を選んだ割合は43.2%、非福祉系4年生では外見的な説明が59.9%、概念的な説明が40.1%となった。これらの結果から、福祉系と非福祉系とではほとんど差が認められなかった。

2)「たてまえ」で説明する場合

障がい者について「たてまえ」で説明する場合、福祉系3年生が最も多く選んだのは概念的な説明の「d. 私たちと何も変わらない一人の人間」で、47.5%であった。次いで概念的な説明の「f. 私たちとは違った魅力や個性をもっている人」が44.3%、概念的な説明の「n. 私たちと同じ尊厳をもった人」が36.1%、概念的な説明の「b. 私たちと同じ普通の人間」が31.1%、外見的な説明の「i. 他人の力(手伝い)が必要な人」と外見的な説明の「o. 普段生活している場で不自由を感じている人」が26.2%であった。福祉系4年生が最も多く選んだのは概念的な説明の「d. 私たちと何も変わらない一人の人間」で、50.1%であった。次いで概念的な説明の「b. 私たちと同じ普通の人間」と概念的な説明の「f. 私たちとは違った魅力や個性をもっている人」が47.5%、概念的な説明の「n. 私たちと同じ尊厳をもった人」が39.4%、概念的な説明の「t. 見た目は異なるが差別してはいけない」が37.4%であった。非福祉系3年生が最も多く選んだのは概念的な説明の「b. 私たちと同じ普通の人間」で、48.8%であった。次いで外見的な説明の「e. 盲導犬を連れている人」が42.9%、概念的な説明の「d. 私たちと何も変わらない一人の人間」が39.3%、概念的な説明の「f. 私たちとは違った魅力や個性をもっている人」が36.9%、概念的な説明の「n. 私たちと同じ尊厳をもった人」が26.2%であった。非福祉系4年生が最も多く選んだのは概念的な説明の「b. 私たちと同じ普通の人間」で、52.4%であった。次いで概念的な説明の「f. 私たちとは違った魅力や個性をもっている人」が46.7%、概念的な説明の「d. 私たちと何も変わらない一人の人間」が45.7%、概念的な説明の「n. 私たちと同じ尊厳をもった人」が31.4%、概念的な説明の「t. 見た目は異なるが差別してはいけない」が27.6%であった。

各学年の回答された選択肢を外見的な説明の選択肢と概念的な説明の選択肢に分類し、表2同様に計算し直した結果を表したものが表4である。表4によると、福祉系3年生が外見的な説明の選択肢を選んだ割合は35.6%、概念的な説明の選択肢を選んだ割合は64.4%、福祉系4年生では外見的な説明が30.4%、概念的な説明が69.6%、非福祉系3年生が外見的な説明の選択肢を選んだ割合は27.4%、概念的な説明の選択肢を選んだ割合は72.6%、非福祉系4年生では外見的な説明が28.3%、概念的な説明が71.7%となった。これらの結果から、福祉系と非福祉系とではほとんど差が認められなかったが、各学年ともに概念的な説明が著しく多かった。

考 察

小・中学生を対象に障がい者について説明する場合、福祉系学生も非福祉系学生も外見的説明より概念的説明の選択肢を選ぶことが多かった。また、障がい者について「ほんね」で説明する場合は、福祉系学生も非福祉系学生も外見的説明の選択肢を選ぶことが多く、「たてまえ」で説明する場合は、福祉系学生も非福祉系学生も概念的説明の選択肢を選ぶことが多かった。このことから、障がい者について説明する場合、「ほんね」では外見的なことで説明し、「たてまえ」では概念的なことで説明すると考えられる。

以上から、福祉系・非福祉系に関わらず、障がい者について説明する場合、「ほんね」もしくは「たてまえ」の使い分けをする二面性があると指摘できる。

文 献

- 岡村綾子（2001）日本及び韓国の学生の社会福祉に対する意識に関する考察．日本社会福祉学会第49回全国大会報告要旨集，479.
- 岡村綾子（2002a）学生の社会福祉に対する態度—2000年度入学者と2001年度入学者の比較—．金城大学紀要，2，1—18.
- 岡村綾子（2002b）ボランティア活動に対する大学生の態度変容に関する考察—縦断的調査を中心として—．日本社会福祉学会第50回記念全国大会報告要旨集，139.

- 岡村綾子（2003 a）社会福祉系学生の社会福祉に対する大学入学以前と入学以後の態度—日本と韓国の大学生の比較—. 金城大学紀要, 3, 13-28.
- 岡村綾子（2003 b）ボランティア活動に対する韓国大学生の態度に関する考察—2001年度と2002年度の新入生の比較—. 日本社会福祉学会第51回全国大会報告要旨集, 384.
- 岡村綾子（2004）社会福祉に対する学生の態度に関する考察—追跡的調査を中心として—. 金城大学紀要, 4, 17-32.
- 岡村綾子（2005）学生の社会福祉に対する態度変容. 日本社会福祉学会第53回全国大会報告要旨集, 450.
- 岡村綾子（2006 a）大学生の障害者及び高齢者に対する態度に及ぼすボランティア活動の影響. 金城大学紀要, 6, 27-42.
- 岡村綾子（2014 b）福祉系大学生の障害者に対する理解について—非顕在的態度を中心に—. 日本社会福祉学会第62回秋季大会報告要旨集, 697-698.
- 岡村綾子（2015 a）福祉系大学生の障がい者に対する理解について—非顕在的態度を中心に—. 金城大学紀要, 15, 19-30.
- 岡村綾子（2018 b）福祉系大学生による障がい者の外見的理解と概念的理解—学年進行に伴う変化—. 日本社会福祉学会第66回秋季大会報告要旨集, 347-348.
- 岡村綾子（2019 a）福祉系大学生の学年進行に伴う障がい者理解の変化—外見的理解と概念的理解について—. 金城大学紀要, 19, 49-62.
- 岡村綾子（2019 b）福祉系大学生の障がい者の理解—本音と建前—. 日本社会福祉学会第67回秋季大会報告要旨集, 393-394.
- 岡村綾子（2020）福祉系大学生の障がい者理解—「ほんね」と「たてまえ」—. 金城大学紀要, 20, 29-46.
- 栗田李佳・楠見 孝（2012）障害者に対する両面価値的態度の構造—能力・人柄に関する潜在的-顕在的ステレオタイプ—. 特殊教育学研究, 49（5）, 481-492.
- 清水貞夫（1985）精神薄弱者に対する意識や態度の研究. 特殊教育学研究, 22（4）, 58-61.

表 1 障がい者についての説明事項

外見的な説明	概念的な説明
a. 手話で話している人	b. 私たちと同じ普通の人間
c. 車イスに乗っている人	d. 私たちと何も変わらない一人の人間
e. 盲導犬を連れている人	f. 私たちとは違った魅力や個性をもっている人
g. 私たちと同じクラスではなく特別クラスにいる人	n. 私たちと同じ尊厳をもった人
h. 私たちより上手くできることが少ない人	p. 努力で補えないことがある人
i. 他人の力(手伝い)が必要な人	r. 単なる個人差である
j. 私たちと同じようなことができない人	t. 見た目は異なるが差別してはいけない
k. 私たちよりものごとを進めるのに時間がかかる人	v. 知らされないと(説明を受けないと)わからない
l. 私たちと異なったところがある人	
m. 意思表示に時間がかかる人	
o. 普段生活している場で不自由を感じている人	
q. 病気や障害によって日常生活を送ることが困難な人	
s. 生活に支障をきたしている人	
u. ちょっと個性的である人	

表 2 学年別に示した外見的な説明と概念的な説明の各選択数の合計
— 小・中学生に説明する場合 —

学年	福祉系		非福祉系	
	3年	4年	3年	4年
外見的な説明	171 (48.4%)	321 (45.3)	181 (42.0)	285 (45.6)
概念的な説明	182 (51.6%)	387 (54.7)	250 (58.0)	340 (54.4)

表 3 学年別に示した外見的な説明と概念的な説明の各選択数の合計
—ほんねで説明する場合—

学年	福祉系		非福祉系	
	3年	4年	3年	4年
外見的な説明	207 (58.1)	442 (58.6)	208 (56.8)	407 (59.9)
概念的な説明	149 (41.9%)	313 (41.5)	158 (43.2)	273 (40.1)

表 4 学年別に示した外見的な説明と概念的な説明の各選択数の合計
—たてまえで説明する場合—

学年	福祉系		非福祉系	
	3年	4年	3年	4年
外見的な説明	124 (35.6%)	192 (30.4)	111 (27.4)	174 (28.3)
概念的な説明	224 (64.4%)	439 (69.6)	294 (72.6)	441 (54.4)